

# 今、滋賀県が求める 自然共生型の地域社会とは

滋賀県知事 嘉田 由紀子  
2007年 6月 26日  
中央環境審議会 生物多様性国家戦略小委員会



1

## 1 . 自然と文化のかかわり

2

## 30年間、現場を徹底して歩き、 耳を傾けることで、わかったこと

- 琵琶湖周辺の人びとの暮らしと自然との  
かかわりを湖辺の各地を歩きながら、  
ちょっと昔の話を徹底して聞き書き。
- 当事者としての意識、人びとがこだわりを  
もっていたのは、自然とのかかわりの喪失  
だった。
- つまり、問題そのものが属地的、属人的に  
多様だった。

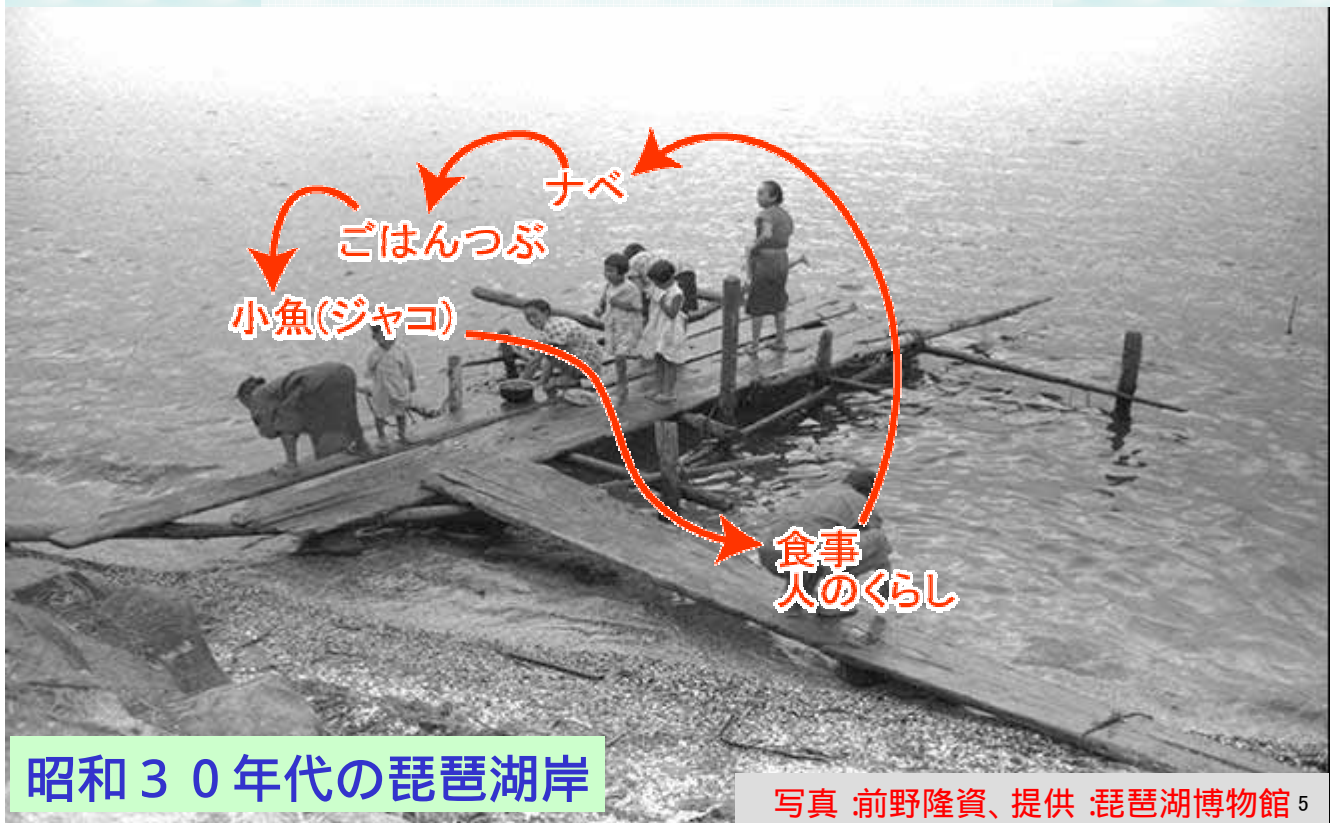
3

## 人びとが好んで語ってくれたこと

- (1) 多種多様な生き物  
「この川にはホタルが顔にあたるくらいたくさんいた」  
「ボテジャコがあふれるほどいた」
- (2) 生活の中で生きていた湖と川  
「この川からは風呂水をくんで洗濯をした」  
「この川の水は昔は飲めたのに・・・」
- (3) 子どもたちの遊び場としての水辺  
「毎日、川に魚つかみにいった」  
「えかい(大きな)ナマズをつかんだことはわすれられん」
- (4) 小さなコミュニティによる自主的な治水対策と川への  
愛着  
「大雨のとき、堤防の見回りを自分たちでした」  
「堤防直しも自分たちでした。川は私たちのもの」

4

# 湖はよごれなかった？ 湖岸の生活と生態システムの循環



環境問題を考えるときには・・・

科学的思考」(三人称)

と

文化的思考」(一人称、二人称)

という複眼の思考が必要



自然環境の質を論じるときには  
一般的に「希少種がいる」、  
「固有種がいる」といった  
科学的データが用いられる

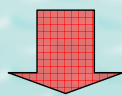


科学的思考

7

データでは表せない価値がある

- (1) 川や森とかかわり続けるくらし
- (2) 近い水、近い木々への関心
- (3) 水辺や里山の風景の価値は無限
- (4) 歴史性と文化性、心地よい風景とは？



文化的思考

8

科学的思考

+

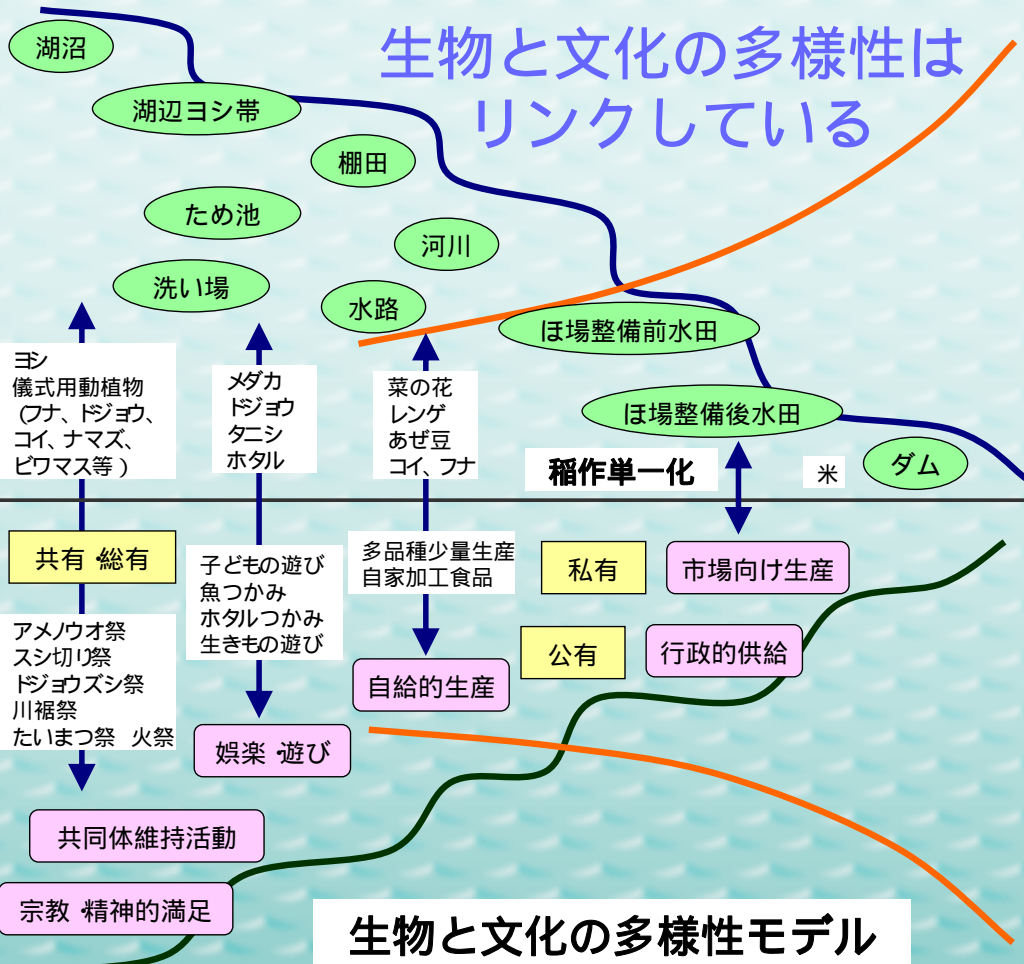
文化的思考



環境問題の多面性が見えてくる

生物と文化の多様性はリンクしている

高  
↑  
生物の多様性  
↓  
低  
↑  
文化の多様性  
↓  
高



生物と文化の多様性モデル

# 水路はどこへ・・・

田舟で牛を運ぶ。水路の多かった幸津川(さづかわ)では田への行き来はほとんど舟で、田起こしの時期には牛も田舟にのせていった。牛をのせる田舟は、ふつうのものよりも幅が広く安定していた。下新川(しもにいかわ)神社のお旅所が舟着き場になっていたが、今では埋め立てられて面影はない。



守山市幸津川 1954 (昭和29)年 / 写真 藤村和夫



1997 (平成9)年 / 写真 古谷桂信

(提供 :琵琶湖博物館)

## 2 . 滋賀県の実組事例



# 「マザーレイク21計画」 (琵琶湖総合保全整備計画)

## 基本理念 琵琶湖と人との共生

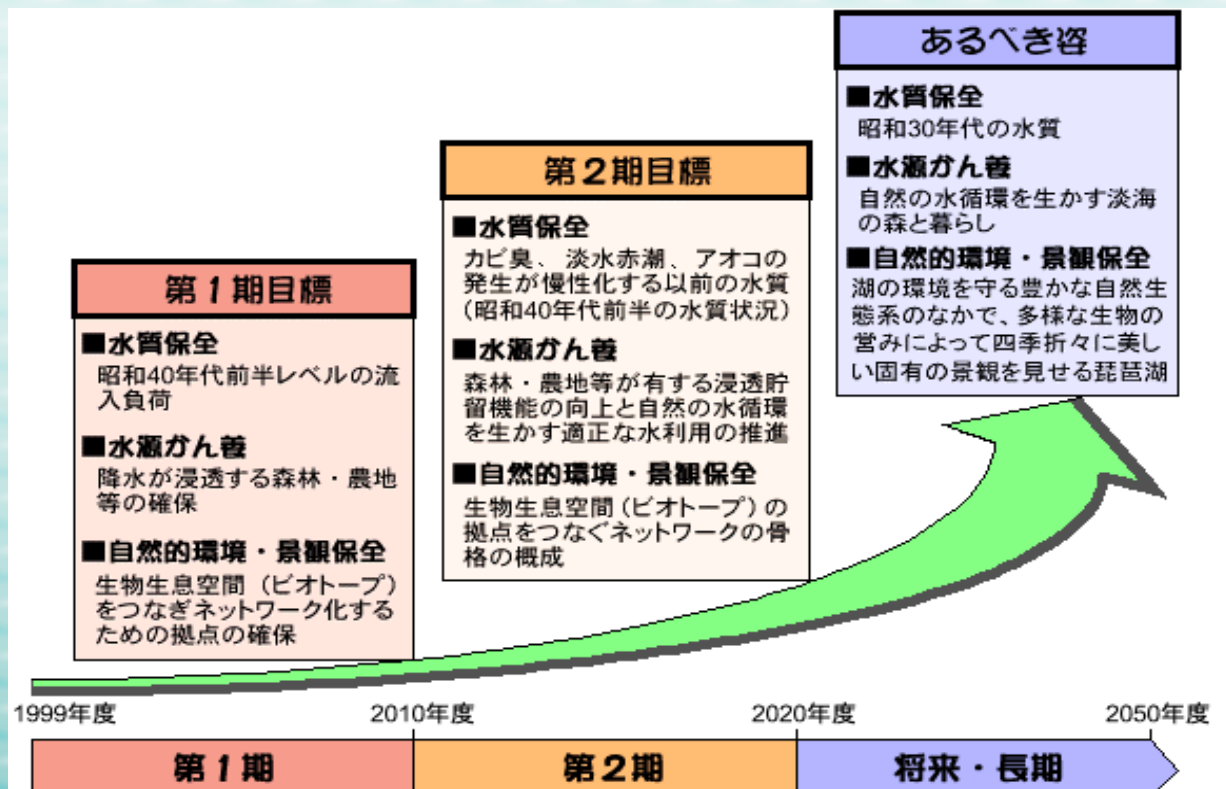
～ 琵琶湖を健全な姿で次世代に継承します～

## 基本方針

- ・ 共感 (人々と地域との幅広い共感)
- ・ 共存 (保全と活力あるくらしの共存)
- ・ 共有 (後代の人々との琵琶湖の共有)

13

## 計画期間と段階的計画目標



14





# 魚のゆりかご水田プロジェクト

湖魚が産卵・成育できる水田環境を取り戻そう！〔“うおじま”再生〕

琵琶湖周辺の 昭和40年頃まで  
田園環境



湖岸の水田は、琵琶湖の水位の変動による浸水被害や田んぼによる農作業など、農家は大変苦労されていました。一方で、えさになるプランクトンが豊富であったかい田んぼは、湖魚の産卵・繁殖に格好の場所、まさに「魚のゆりかご」としての役割を担っていました。

昭和40年代から現在にかけて



ほ場整備により、生産性の向上や農業経営の改善が図られました。一方で、乾田化のために水路を深くしたため、魚が田んぼに遡上しにくくなりました。

魚のゆりかご水田プロジェクト



世代をつなぐ農村まるごと保全向上対策」などを活用し「魚のゆりかご水田プロジェクト」に取り組み、農業生産性を維持しながら、魚が産卵・成育できる水田環境を取り戻します。

## 湖岸の田んぼと魚の関係



琵琶湖と田んぼの間を自由に往き来して いました。



ほ場整備によってできた水田と排水路の落差 排水路の整備に伴い、琵琶湖と水田が 分断されました。



魚道設置による 水田と排水路の落差解消 魚道の設置により水位が階段状に田んぼの 高さまで上がり、湖魚が田んぼで産卵成育 することができます。

## 取組状況



湖魚が産卵のため魚道を遡上 (ナマズの遡上)



湖魚が田んぼで産卵 (ニゴロブナの産卵)



田んぼで稚魚がふ化 (ニゴロブナ稚魚の遊泳)



生きもの観察会を通じ、琵琶湖と田んぼの関係を多くの方に説明

『魚のゆりかご水田』は、五方によし

## 生きものによし

田んぼは、エサのプランクトンが豊富で、オオクチバス等の外敵がいいため稚魚の生存率は30%と高く、まさに魚にとって「ゆりかご」となります。

## 琵琶湖によし

魚道で排水路を堰止めることにより、田んぼの濁水を押さえることができます。

## 地域によし

多くの方が田んぼを訪れるようになり、交流が生まれ、田んぼに人と生き物のにぎわいが戻ります。

## 農家によし

「魚のゆりかご水田米」として、魚にやさしい田んぼでつくられた、人にも優しい安全で安心な米のブランド化を目指しています。

## 子どもによし

農業が機械化され、子どもたちが水田や畑に近づく機会が減りました。田んぼに魚がいることで、子どもたちも水田、米づくりに興味を持つようになります。

## 取組み状況

H18年度 約40 ha  
H19年度 約80 ha



湖国名産「いなずし」

# 琵琶湖お魚ネットワーク

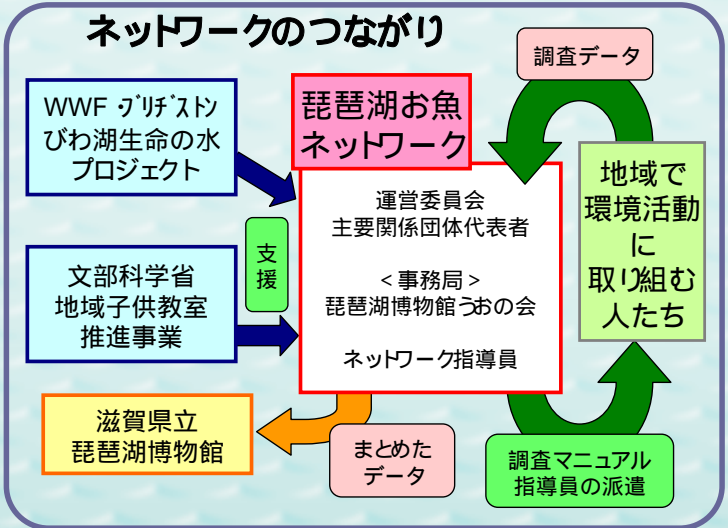


**調査地点数**  
**8,149地点**  
 初級 4,680地点  
 上級 3,469地点  
 (2004/8/8-  
 2007/1/15)

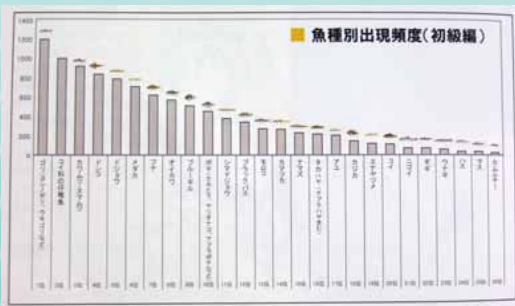


琵琶湖お魚ネットワーク  
 報告書

## ネットワークのつながり



年度	参加人数	イベント数
2005年	約20,000人	148
2006年	約20,000人	145

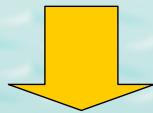


お魚ネットワークの活動は、魚捕りを楽しむことである。と同時に、楽しんだ結果をネットワークで一つに結びつけ、身近な生活空間の魚の分布情報を明らかにすることを目標の一つとしている。この活動は、魚と人間の関係の歴史を振り返りつつ、水環境を大切にすることを育み、魚と人間の新しい関係を再構築していることにもつながっている。

## 3 . 国家戦略への提言



- 昭和30年代までの、「もったいない」という生活哲学に裏打ちされた「ちょっと昔の暮らしぶり」
- 自然とのかかわり、人とのつながりを大切にしたあの時代にあった、暮らしの知恵や工夫を、現代にうまく取り入れる。



懐かしい未来

21

## 自然共生型の地域社会実現のために - 懐かしい未来の創造 -

- (1) 節約：物が循環する節約社会（使い回し文化・もったいない）を復活させる施策
- (2) 合理性：生態的仕組み・科学的なりたち（つながりシステム）を再生させる施策
- (3) 感謝：自然の命・力を「いただく」という気持ち、「ありがたい」、「もったいない」と思う精神を尊重する施策

22



# ま と め

- ( 1 ) 共感による主体性の回復  
身近な環境の「自分化」  
一人称としての環境保全運動  
〔ひとりのクロウトより 100人のシロウト〕
  
- ( 2 ) 生きものの生存と自分たちのくらしの共存  
人間と分断された自然保護ではない。  
使いながら、かかわりながら守る自然  
～ 日本型・東洋型自然観 ～  
「里山・里川・里湖・里海」の思想
  
- ( 3 ) 次世代との自然の価値の共有  
自然の持っている本来の価値を損なわず、次の世代に  
手渡す。